

滑稽新聞社

〒444-0103 愛知県豊田郡幸田町
大字大草字村直屋敷(科ナシ) 63

第358号 創刊 平成2年7月28日

滑稽新聞

「人はいは
多うへき人には
必ず逢える
しかも
一瞬早過す
一瞬遅すぎない
時に」小林信三先生の
ことばです

康司さんの逝去にあたり、多くの方々に心を寄せていただきました。
おひとりおひとりにお礼を申し上げたい
と思いつつ、時が過ぎてしまいました。
あらためて、感謝の思いを伝えさせて
いただきます。

最後の滑稽新聞です。

コロナ禍で、家族葬が増えつつある時、
康司さんが「ほくの葬儀は、まっちゃんとお別
れがしたいから、みんなに来てほしいとい
なめ。」と言いました。その時は、康司
さんも私もそれはまだずつと先の話だ
と思っていました。

それが、三年後、指のけががもとで、十日後
に旅立ってしまった。享年七十四歳。
本当のこととは思えませんでした。

でも、生前の康司さんの言葉を思
い出し、泣いてる場合じゃない、康司さん
かのぞんでいた葬儀をやるしかない、と
思いました。息子夫婦、親族の方達、
友人達がサポートしてくれました。
本当に有り難かったです。

葬儀会場には、康司さんが取り組んできた活動を
みなさんに知っていただき、いろいろなものを展示し
ました。大草尋常小学校の看板、複写ハカキ、日本各
地の風景印、海外語学留学の早稲等々を見て
いただきました。

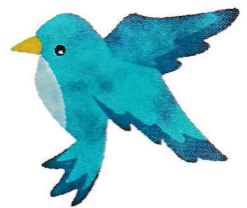
その中に滑稽新聞の原稿もありました。滑稽新聞は、
康司さんが平成2年から33年間、亡くなる前まで書
いていたひとり新聞です。日常の中で見つけた笑し
い話題、感動したこと、くすくす笑える話等を記事
にして、手書きと縦書きにこだわって書いていました。
滑稽新聞の読者の方達から返事をいただけると
とても嬉しそうでした。

滑稽新聞の題字を書いて下さった加藤功さんが
35号で終わっているのを見て、「次の号の358という数字
は、幸運を呼び込む数字と言われているから、最後
の358号をやっちゃんに書くといふよ。」と言われまし
た。それからずつと、358号の滑稽新聞を書きつ、書き
つと思いつながら、なかなか気持ちの整理がつかず、
今になってしまいました。

二年を経て、やっと358号最後の滑稽新聞を
書き上げることができました。
感無量です。

不思議なこと

康司さんがセクになって五日後、
一羽の鳥が窓の外から部屋の中を
見て、ずっと羽ばたいているのです。
「あれ、？」そしてはつとしました。



むしろ、この鳥は康司さんで、私にメー
ッを届けにきてくれたのではな
いだろうか……
思わず、「こうちゃん、わがたよ。いつも見守っ
ているよって伝えに来てくれたんだよね。」と言
うとしばらく羽ばたいて、すうっとでんぐいさ
しました。

そして、今康司さんが
様々な形や方法で、私を助けてく
れているのを感じます。

天国版尋常笑学校

康司さんは、東京勤務がきつ
かけで、それまでの真面目な
生き方から、いんなこともお
もしろかって生きるに
路線変更し、いろいろなこ
に楽しく取り組んでいます。
大東尋常笑学校もそのうちの
ひとつです。

この度、天国版尋常笑学校を
開校したそうです。有名な落
語家や漫才師が無料で出演
してくれ、入場無料で、大盛
況とラインが入りました。

御縁をいただいたみなさま
本当にありがとうございました。
楽しい有意義な人生でした。
また、いつかお逢いしましょう。

杉浦康司



心ばかりのものです。お納めいただければ幸いです。
同僚の日が続いています。どうぞご自愛下さい。

感謝を込めて 杉浦康代